

悪夢で乾盃

夢枕 獏



角川文庫

あくむ かんばい
悪夢で乾盃

ゆめまくら ばく
夢枕 獺



角川文庫 822I

平成三年四月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

編集部(〇三)三八一七―八四五―

電話 営業部(〇三)三八一七―八五二―

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

悪夢で乾盃

夢枕獏



角川文庫 8221

目次

山と旅そして釣り・ここではない彼方へ

旅心を刺激されるマンガ本

山で学んだこと

南町の貴公子は北の果てでホッケにかぶりついたので

あった

「幻獣変化」

泥沼もまた楽し

アメリカで猫と税金の話をしたのだった

今年も鮎あゆの季節がやって来たのだ!!

鮎のパズルの楽しみ方

落ち鮎の記

早川をなんとかせにや

韓国ドライブ紀行

長安幻夢変——中国旅行顛末記

九

三〇

五

九

〇

四

七

〇

三

七

四

三

空と風に興奮する旅——ユーコン河を野田知佑氏と下る

六七

岩魚いわなとわさびの日々

六七

山の頃

六七

芝生への入り方

六七

異国の祭り

一〇三

川を愛す

一〇五

ビールに操ささを捧げた夏だった

一〇六

家族五景阿鼻あびきようかん叫喚

一一五

娘が可愛いのは困る

一二六

娘の雪ごはん

一二九

うちの娘は三輪車に乗って力いっぱい泣く

一三三

おれの娘は叫ぶのが好きなのである

一三七

カミさんのジョーク

一三二

やっぱり、倒れて本望

一三七

我が創作を語る「奇想天外」昭和五十二年十月号デビュー

作掲載のうちに)

一三八

しみじみと書きてえんだよ

長編はしんどいのだよ

西遊記でとどめだ

キマイラシリーズのこと

幼稚園のヒーロー

無節操おぼんは宇宙のゴミためでミミズとあそんでい

ろ!!

奇迷羅

カジ氏との清い関係

タイポグラフィクションの造り方

愛^{いと}しの地虫平八郎

閉ざされた時間

いや、どうも、十年目です

めぐりめぐって今宵^{こよひ}の酒よ

魔術という病^びい

ひたすら書いた、ニューヨークでも書いた

美しい鬼を書きたい

ターザン心を刺激されました

一三九

一三八

一三三

一四四

一四四

一四七

一五一

一五四

一五五

一六六

一六六

一七〇

一七三

一七六

一七七

一八〇

一八六

節操のない日々

わかつちやったのだ活字は嘘である!!

初のグラビア撮影を菊地秀行氏とやったのだった

菊地秀行の「淫魔宴」——ふっきりの美学

菊地秀行に夢枕獏が送る公開質問状

優しい目のひと

バオーの説得力ある描写にはうなった!

酒、雪、鮎——そして神林長平にうなった夜

冬杜絵巳子との清い関係

小松和彦著「鬼の玉手箱」——鬼についてプロレスから

語り始めてみようか

小松左京の「くだんのはは」

岬さんのこと

矢印の先のファンタジー

木原さんのこと

人外魔境を求めて

これは奇書だ

一八

二〇三

二〇六

二〇七

二二

三三

三六

三七

三四

三七

三三

三四

二四七

二五〇

二五一

二五四

格闘技に仁義あり

いいプロレスをなぜやらんのだ

猪木対藤原戦を考える

UWFファンの提言

UWFの復活を祈って

北斗旗に夢中です

あとがき

初出紙誌一覧

二七

二六

二五

二四

二三

二二

二〇

一九

山と旅そして釣り・ここではない彼方へ^{むこう}



旅心を刺激されるマンガ本

おれにとって、旅というのはいつも切ないものだった。

というのも、おれが旅に出るのは、常に女にふられた直後と決まっていたからである。まったくもって、情ない旅ばかりをおれはしてきたのである。

旅の目的とは何か？

これはもう、おれには結論が出てしまっているのだけれど、おれの場合、たとえばそれはどこかへ行く——つまり富士山のとっぺんへゆく、というようなことではないのである。その場合、富士山とか、インドとかいうのは、とりあえずの目標でしかないのである。旅の真の目的というのは、ここではない別の場所へゆくという、そこにつきるのではない。だから、富士山もインドも、とりあえずの目標でしかないのだ。つまり、そこへ着いてしまったら、その場所はここになつてしまふのである。

おれが旅に行きてえよなあ、と思うのは、目的も定めず、果てしなくふらふらとさまよいたいのであって、テーマも何も持たずに、その時の気分と懷具合のみのベクトル関係で、地球の上を、あっちやらこっちやらへ行つてみたいということなのである。

しかし、こう書いてみると、どこかに嘘うそがあるような気がするな。

おれ自身が、今現在したい旅というのは、ザックをかついで、中国からインドまで、玄奘三蔵が通った道を、はるばる這いずるようにしてたどりつきたいという、そういう旅なのである。だから、この場合は、インドとは呼ばずに、天竺と呼ばねばならない。

ようするにおれは、「西遊記」をやりたいのだった。

旅への憧れは、いつも、哀しく切ないよな。

手塚治虫の「火の鳥」の鳳凰編というのは、まさに旅の物語である。

この本を読むたびに、必ず涙をじわっと流してしまうのだが、そのシーンはいつも決まっている。

前半の主人公である茜丸というのが、「火の鳥」を彫刻で彫りたくてそのモデルを捜して日本中を旅してまわる。そしてついに、正倉院でその鳥の絵を見ることができののだが、そのシーンになると、ぼくはいつもはらはらと涙してしまふのである。

「わたしはきつと唐へわたる。そして、この鳥と、死ぬまでにならずめぐりあうぞ、かならず……」

という、茜丸の台詞があり、茜丸が絵に描かれた火の鳥の足元にすがりついているという図なのだが、これはもう、どう話したって、このマンガを読んでない人間には伝えようがないのだ。火の鳥というのは、不老不死、永遠の生命のシンボルであり、いつの世でも、そういうものを求めようという人間はいるのである。

そういう、手に入らぬものを、手に入れようという行為に、おれは切ない胸の苦しくな

るようなロマンを感じてしまうのだ。

それは、旅へ胸を焦がす思いと、基本的には似ている。

ここからあちらへ行こうと思っても、あちらへ着いた途端に、あちらはここになってしまい、あちらへゆこうとするものは、永久に旅を続けなければならない。

彼岸だとか、不老不死だとか、地平線だとか、恋だとか、宇宙だとか、無限とか永遠だとかいう言葉は、どこかしらに「旅」の匂い（におい）を引きずっている。

おれの場合、「旅」というイメージを一番かきたてる言葉は「天竺（てんじく）」という言葉である。そして、ついに、来年あたりから、ぼちぼちと「西遊記」の旅をはじめようと思っているのである。

さて、ぼくにとって、一番旅心を刺激されるマンガの本を、以下に選んでみた。

気がむいた方は、ぜひ、ごらんになって下さい。「西遊記」以外は全て、手に入るはずである。

*

「火の鳥」手塚治虫（角川書店・1―10）

「シュマリ」手塚治虫（角川書店・1―3）

「西遊記」手塚治虫（光文社・絶版）

「浮浪雲」ジョージ秋山（小学館ビッグコミック・1―35、各450―480円）

「岳人列伝」村上もとか（小学館少年ビッグコミックス・1、340円 2、360円）

- 「カムイ伝」 白土三平（小学館ゴールデンコミックス・1―21、各430円）
 「2001夜物語」 星野之宣（双葉社・1―3、各780円）
 「子連れ狼^{おおかみ}」 小島剛夕（双葉社アクションコミックス・1―14、各880円）
 「ジロがゆく」 真崎守（朝日ソノラマ・1、2、各570円）
 「暗黒神話」 諸星大二郎（集英社ジャンプスーパーコミックス・360円）

山で学んだこと

ぼくが、山で学んだことは多い。

ぼく自身がどういふ人間であるのかということに気がついたのも、二十代の前半に山に入ってからであった。

大学を卒業して、福音館の就職試験に落ちたぼくは、前から決めていた山に入った。場所は奥上高地^{おくかみこうち}——明神池^{みよしんいけ}の近くにある、山小屋と、普通の旅館との中間ぐらいの山宿である。

単純に山の中で働くということにあこがれて入ったのだが、なかなかどうして、楽な仕事ではなかった。客よりも先に起き、客よりも後に眠るのが、仕事の基本である。

ボイラーの仕事から、魚の焼き方、皿の洗い方、客に出す食事のあれこれまで、ぼくは

そこで勉強したのだった。一日のうちに、昼に二時間だけ、自由になる時間がとれる。その時間に、岩魚^{いわな}をハエで釣り、わさびを採り、キノコを採り、蜂^{はち}の巣を地面から掘り出して、蜂の子を焼いて喰^たべたりした。

山の見方や、どの峰からの雲が、一時間でどういう動き方をするか、そんなことは山で暮らすうちに、自然にわかるようになった。

そして、そのような山の中にまで、結局ついてまわるのは人間関係であった。

ある者は、そういう生活に耐えられずにすぐに逃げ出したりもした。

色々な人間を見た。

そこで、ぼくは、「SFマガジン」の新人賞に応募した自分の原稿がどうなったか、不安と期待の入り混じった気持ちで、その結果を待っていたのだ。

山で、ぼくが知ったのは、人間はどのような生き方をしてもいいのだということであった。

どのようにも生きられる。

そして、自分には、世間で言われる普通の生き方はできないのだということを、ぼくはそこで知ったのだった。

山での、というより信州でのそういう生活からぼくは抜け出せなくなり、小田原^{おだわら}と信州との行ったり来たりが、三年から四年くらいは続いたような気がする。

色々な仕事を転々としながら、そのパターンをくりかえしていたのだ。

そういった生活の中で、小説を書くしかないという思いをぼくは強くしてゆき、デビュー作も、その山で生活しながら書き送ったものの中から生まれたのだった。

もし、大学を卒業した年に山に入っていなかったら、現在のぼくはもう少し違っていたように思う。おそらく、小説を書くというそこだけは、間違いなかったろうが、今の夢枕獏とはもう少し違うポジションに、ぼくはいたはずだ。

南町の貴公子は北の果てでホッケにかぶりついたのであった

びっくりしましたねえ。

何にびっくりしたかというと、まあちょっと聞いておくれよ。

この夏、私めはひいこらやっとの思いで長編「幻獣変化」を書きあげました。

で、そのはずみかどうか、なんと飛行機などというシロモノを使って北海道へ行ってきたのであります。

というのも、八月二十九日の晩、信州の友人から電話があつて、突然そういうことになつてしまったのです。

「どっか行かないかね」

と、これはぼくの友人です。